様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　３月３１日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19820061
研究課題名（和文）　加飾壺の成立・展開からみた古墳祭祀の創出過程
研究課題名（英文）　The process of invention of rituals related to burial mounds with a focus on the formation and evolution of decorated pots in the early Kofun Period Japan

研究代表者
廣瀬　覚（HIROSE　SATORU）
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部・研究員
研究者番号：30443576

研究成果の概要：
古墳出現期（庄内式期）に盛行する加飾壺およびその関連資料を、全国的に集成するとともに、形態や製作技術の観察に基づく型式学的検討や分布状況の分析を実施し、同資料の成立・展開過程を検討した。その結果、加飾壺の淵源を伊勢湾沿岸地域に求める近年の有力な見方とは異なり、加飾壺の成立や広域波及の中核を担ったのは近畿中部勢力であったとの結論に達した。同時に、加飾壺の展開をめぐる地域間の相互交流のあり方が明らかとなり、古墳祭祀の創出過程における地域関係の解明において重要な所見を得ることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	610,000	0	610,000
２００８年度	630,000	189,000	819,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,240,000	189,000	1,429,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：出現期古墳、加飾壺、地域関係、古墳祭祀

１．研究開始当初の背景

古墳時代は、近畿中部に成立した王権を核に日本列島を広範囲に覆う政治的枠組みが形成された時代として評価される。そうした政治的関係が構築されていく上で媒介として重要な役割を果たしたのが、前方後円墳を中心とする古墳の築造、およびそこでの葬送儀礼（古墳祭祀）である。しかしながら、古墳祭祀が創出され、広範囲に共有されていく過程については、十分明らかにされているとは言いがたい。その要因としては、当該期の地域関係の実態が未だ不鮮明な状態にあることがあげられる。

近年の古墳時代像をめぐっては、近畿中部勢力の主導性が低く見積もられ、地域側の主体性が強調されるようになってきた。ことに古墳の成立、古墳祭祀の創出過程に関しては、そうした傾向がいっそう顕著になってきている。それらの見解の多くは、古墳祭祀を構成する諸要素は、弥生時代の近畿中部には系譜が辿れず、各地域の弥生墳丘墓で培われたものを再構成したものであるとの理解に立脚している。

定型化した前方後円墳の成立に前後して

盛行する加飾壺をめぐる昨今の議論は、まさに上記のような研究動向を象徴するものと言える。体部上半や口縁部に櫛書や押印による装飾を施し、器面全体にミガキ手法で光沢感を与えられた加飾壺は、当初は墳墓上で用いられる儀礼用土器としての性格を有していたが、底部に穿孔を加え、墳墓上に大量に立て並べられることにより、壺形埴輪に転化していくことが知られている。加飾壺は、従来、近畿地方の古墳出現期の土器様式として理解されてきたが、近年、この土器の故地が伊勢湾沿岸地域にあり、また壺形埴輪への道筋も伊勢湾沿岸地域の伝統の中で培われたとする見方が強く押し出されるようになってきた。

その一方で、本研究の開始前には、各地で弥生墳丘墓の年代観を見直す作業が進み、一定の成果をあげつつあった。とりわけ、東四国地域や東海地域の弥生終末期の土器の年代観が引き下げられたことにより、近畿中部よりも他地域に先進性が認められてきた諸要素の位置づけおよび系譜関係にも、再検討の余地が生じていた。それを受けて、古墳祭祀の創出過程における特定地域の役割を過大評価するのではなく、広く東アジアの歴史的動向も踏まえて、古墳の出現を理解しようとする気運が高まりつつあったと言える。

こうした出現期古墳をめぐる研究情勢を背景に、基礎的な研究に立ち返って加飾壺を検討し、古墳祭祀創出過程において同資料を正確に位置づけける作業が求められていたと言える。

２．研究の目的

上述のように、本研究が対象とする加飾壺については、東海地域の装飾壺（パレススタイル壺）を淵源とし、それを近畿地方が受容したものとする見方が主張されるようになってきた。そうした見解は、近畿地方の研究者の間でも受容されつつある。

しかしながら、加飾壺については、資料の集成、製作技法の検討や適切な型式分類、編年や系譜関係の整理、といった基本的な分析作業が十分になされてきたとは言い難く、加飾壺の成立と展開に関する理解も十分深められていないと言っても過言ではない。そこで本研究は、まず、加飾壺の集成作業を実施し、研究基盤を整備することを第一の課題とした。それと同時に、型式学的検討や分布論等の基礎的な分析を遂行し、加飾壺の成立や展開過程を再検討することを研究目的に掲げた。

これまで、加飾壺の成立・展開過程を的確に整理した研究は皆無と言ってよい。その要因としては、加飾壺の盛行期間が比較的短期間であることとともに、従来の研究がその展開を特定の地域内でのみ追及しようとしてきた点に問題があると考えた。加飾壺は、同一の施文原理で装飾されるものの、一遺跡（墳墓）出土資料においても、形状の統一性に欠け、多彩な口縁部形態を有する壺が混在する点に特徴がある。その一方で、近畿地方や伊勢湾沿岸地域では、遺跡や地域を越えて口縁部形態を同じくする同一型式の壺が出土する場合も多い。このことは、故地を異にする壺が地域を越えて積極的に交流しあった結果、一遺跡内における加飾壺の多様性が生じた可能性を強く推測させる。

これまでの研究では、こうした一遺跡内にける加飾壺の型式差がほとんど着目されてきておらず、それが意味するとことが十分問われていない。本研究では、一括資料中における型式組成を厳密に把握した上で、それを遺跡間で比較しながら、地域相互の影響関係、系譜的つながりの実体を明らかにしたいと考えた。

さらに、古墳の定式化以後に盛行する円筒埴輪や壺形埴輪との関係についても検討を加え、加飾壺や壺形埴輪の淵源が東海地域にあるとする昨今の論調を検証したいと考えた。そして最終的には、他の出現期古墳構成要素のあり方も踏まえて、古墳祭祀創出過程における加飾壺を用いた儀礼の意義、それをめぐる地域関係の総合的な理解に迫ることを目標とした。

３．研究の方法

前述のように、本研究では、まず、古墳出現期における加飾壺の全国的な集成作業を行い、研究を遂行するための基盤を整備することとした。

加飾壺の一括資料は、墳墓から出土したものに良好なものが多く、従来の研究や集成作業も墳墓資料を主な対象としてきた。しかし、墳墓資料は、遺存状態が良好な反面、加飾壺以外の土器との供伴はほとんど認められない傾向にある。一方、集落出土の加飾壺は、出土個体数や遺存状況には恵まれないものの、編年的位置づけが比較的容易な甕や高杯といった他器種と共伴関係を有する場合が多い。したがって、今回の集成作業では、墳墓のみならず集落遺跡からの出土事例についても十分留意し、編年的位置づけの手がかりとなるよう土器が共伴している場合は、それも同時に集成することとした。

また各地域における加飾壺の成立や受容を理解する上では、先行する弥生後期段階の壺の型式的特徴や地域性を十分踏まえる必要がある。さらに、加飾壺の展開を受けて、古墳時代に入ってから盛行する壺形埴輪についても、加飾壺からの系譜的つながりの有無を、各地域単位で確認していく作業が必要となる。したがって、そうした加飾壺成立以前、盛行以後の関連資料についても、加飾壺

との関係を留意しながら、適宜、集成することとした。

以上のような方法で研究基盤の整備を進めつつ、その成果を踏まえて資料所蔵機関に赴き、主要な資料の実見作業を進めることとした。加飾壺に限らず、考古資料の分析は、素材・形態（文様）・製作技術等をトータルに捉えて、その製作集団や技術系譜、型式学的変遷を整理することを出発点とする。本研究でも、資料の実見を踏まえて、形態・製作技術に基づく加飾壺の適切な型式分類、系譜・系統関係に即した成立・変遷過程の検討に取り組むこととした。

ただし、短期間では加飾壺の網羅的な実見作業は困難と予想されたため、特定のフィールドを定めて資料の悉皆的な調査を実施し、加飾壺の地域的展開、受容のあり方を把握することとした。

資料見学の際には、必要に応じて実測作業を行い、製作技術を復元する上で重要となる痕跡については細部写真撮影等の記録作業を行った。

加飾壺研究の基盤整理

○加飾壺および関連資料の全国的集成作業

⇩

加飾壺の成立･展開過程の検討

○資料の実見作業、製作技術にもとづく型式学的検討

○共伴土器、関連資料からの多角的検討

⇩

加飾壺からみた古墳出現期の地域関係の検討

加飾壺からみた古墳祭祀創出過程の検討

４．研究成果

平成 19・20 年度を通して、加飾壺および関連資料の集成を実施した。初年度は、西日本地域および、近畿地方の一部、次年度は未完であった近畿地方と東日本地域を対象に作業を進めた。２カ年にわたる集成作業により、全国的な加飾壺の分布状況を把握することができた。その結果、伊勢湾沿岸地域における加飾壺の分布は希薄であり、むしろ分布の中心は近畿地方にある点が明らかとなった。この点は、加飾壺の淵源は伊勢湾沿岸地域にあるとする従来の主張に再検討を迫るものと言える。ただし、こうした分布の傾向のみでは、伊勢湾沿岸地域で出現した後に、近畿地方で広く受容されたという解釈も成立し得る。しかしながら、近年の伊勢湾沿岸地域と近畿地方の当該期の土器編年の併行関係が修正されつつある現状を踏まえると、伊勢湾沿岸地域で先行して加飾壺が成立した可能性は低いものと判断される。

さらに、今回の集成作業の結果、近畿以西では加飾壺が単独で出土するのに対し、伊勢湾沿岸地域では、同地域に特徴的なパレススタイル壺に共伴して加飾壺が出土することが一般的であり、両者の出土状況に差異が存在することが明確となった。このことは、伊勢湾沿岸地域においても、加飾壺は伝統的に用いられてきた壺とは異なる新来の壺と認識されていたことを示唆する。少なくとも、近畿以西と以東では加飾壺の取り扱いに差異が存在したものと理解でき、加飾壺創出の故地や背景を捉えなおす上で、重要な観点になると言える。

さらに、上記のような集成作業の成果を踏まえつつ、加飾壺の型式分類の再検討を進めた。なお、本研究の遂行中の平成 20 年 12 月末には、出現期の古墳として注目を集める奈良県桜井市ホケノ山古墳の発掘調査報告書（奈良県立橿原考古学研究所編 2008『ホケノ山古墳の研究』）が刊行され、これにより、当該期の王権中枢部における加飾壺のあり方が初めて明らかにされた。同報告書の刊行は、本研究における加飾壺の型式分類にも再検討を促す内容を含むものであるが、現状では、下図のように加飾壺をⅠ～Ⅲ類に大別しておくことが有効と判断し、これに基づいて各型式の出土状況を整理した。

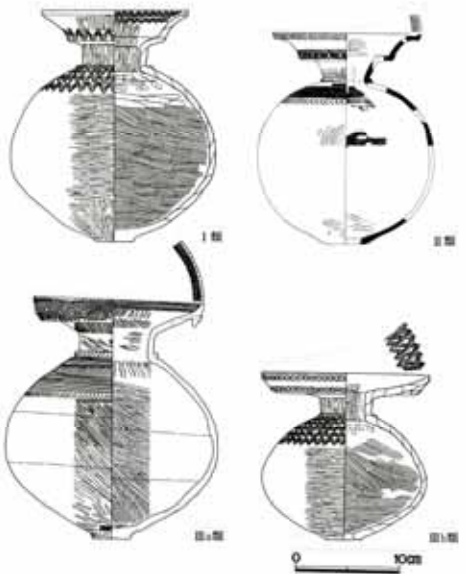

図１　加飾壺の型式分類

加飾壺は、地域を越えて同一の施文原理で加飾されるものの、少なくとも上記のような形態的なバラエティを内包している。重要な点は、近畿中部や伊勢湾沿岸地域では、図 1 にみる複数の型式が同一墳墓・遺跡内において出土する点である。今回の集成作業によっても、その点が再確認されたが、一方で、瀬戸内や北部九州地域ではそうした遺跡内における多様性はほとんど認められないことが新たに判明した。この点は、西日本各地への加飾壺の伝播事情が近畿以東とは異なることを反映している可能性が考えられた。

そこで、西部瀬戸内地域を中心に、出土資料の見学調査を実施し、加飾壺の地域的展開の具体相について考察を深めた。とりわけ、広島・愛媛県域を重点的に調査し、同地域に特徴的な加飾壺の展開を追認する一方で、それとは異なる複数の型式の加飾壺が特に愛媛県域で展開することを確認した。こうした加飾壺の地域受容の複雑なあり方は、西日本各地の小集団がそれぞれ個別に近畿中部との結びつき有した結果、近畿中部における加飾壺の多様性が遺跡ごとの個性となって現れた結果と考えられた。換言すれば、西日本地域への加飾壺の伝播は、近畿中部を介さなければ理解することができないものと判断された。

なお、今回の全国的な集成作業の結果、加飾壺は、西は北部九州、東は関東地方まで出現期古墳の広がりと一体で、極めて広範囲に展開したことを改めて確認できた。ただし、西日本では東四国地域や山陰での出土例がほとんど確認できないこと、東日本では富山県以東の北陸と東北地域には波及しない状況が明らかとなり、この点は王権中枢で創出された古墳出現期の葬送儀礼に対する受容に地域的な偏差が存在した可能性を示すものと考える。

以上、本研究の検討からは、古墳出現期の加飾壺を用いた儀礼が、特定の地域が主導して創出されたのではなく、地域相互の交流の上に成立・展開したことが明らかになったと言える。ただし、加飾壺の展開の中核を担ったのは、分布の集中状況、および東・西日本各地への広がり方からみて、近畿中部地域であったと考えられた。これまでの研究では、近畿中部と伊勢湾沿岸地域との関係のみで加飾壺を検討してきたが、本研究では、瀬戸内や北部九州といった西日本地域の状況も踏まえてより広い視野から分析を実施することで、上記のような結論を導き出せた。

出現期古墳の構成要素ついては、短絡的に列島各地の弥生墓制の中にその系譜を求める従来の研究姿勢が改められつつある。すなわち、中国王朝を核とする東アジア世界との関わりの中で、古墳やそこでの祭祀の創出を捉えなおそうとする作業が進められている。列島各地域との結節点であると同時に、東アジア世界からの新たな影響を受け入れる宗教的・政治的センターとしての近畿中部地域の役割が再評価されつつあると言える。加飾壺を用いた儀礼についても、列島外からの新たな思想的背景をもとに近畿中部で成立し、弥生時代以来の地域間交流を媒体に広い範囲で共有されていったものと見通すことができる。

ただし、本研究では加飾壺の集成・分布状況の整理等、研究基盤の整備に重点を置いたため、型式学的検討については十分深められたとはいえず、加飾壺の各型式の成立過程については、なお検討を続ける必要がある。また、古墳定型化以後の埴輪への発展過程、地域伝播のあり方の比較等も、今後の課題として残された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）
①廣瀬　覚　「前・中期古墳の埴輪生産とその特質」　平成 20 年度大阪大谷大学文化財学科公開講座「古墳出土品がうつし出す工房の風景」平成 20 年 12 月 13 日 大阪大谷大学

６．研究組織
(1)研究代表者
廣瀬　覚(HIROSE SATORU)
独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：30443576

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし